

# 神戸常盤大学で測定依頼を受けた各種補体異常について

畑中道代<sup>1</sup>、北野悦子<sup>1</sup>、北村 肇<sup>2</sup>

<sup>1</sup>神戸常盤大学保健科学部医療検査学科、<sup>2</sup>関西福祉科学大学福祉栄養学部福祉栄養学科

Clinical cases with complement system disorder defined in Kobe Tokiwa University

Michiyo Hatanaka<sup>1</sup>, Etsuko Kitano<sup>1</sup>, Hajime Kitamura<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Medical Technology, Faculty of Health Sciences, Kobe Tokiwa University,

Kobe, Japan, <sup>2</sup>Department of Nutritional Sciences for Well-being, Faculty of Health Sciences for Welfare,

Kansai University of Welfare Sciences, Osaka, Japan

## 〈はじめに〉

臨床現場では、易感染性や全身性エリテマトーデスなどの免疫複合体病が疑われる症例で、補体検査がオーダーされることが多い。CH50 と C3, C4 の蛋白濃度が測定されることがほとんどであるが CH50 の低下が C3, C4 蛋白濃度のデータで説明出来ない場合も多く、その場合補体系の精査が必要となる。しかし、我が国では上記以外の補体の精査のできる施設はなく、多くの臨床医を悩ませている。

これまでは北村らが長年にわたり臨床における補体の相談や解析の依頼を受けてきた（於大阪府立成人病センター、大阪府立看護大学医療技術短期大学部）。平成 17～18 年度は宮川周士先生（大阪大学大学院医学系研究科）のもとで測定を継続した。平成 19 年度より測定のを神戸常盤大学・保健科学部・医療検査学科に移し、補体チームとして臨床症例に於ける補体の相談や解析の依頼を受けることになった。補体各成分の活性を測定できる施設は我が国では他にはないためか、依頼数は予想以上に多く、すでに 47 件の依頼（相談を含む）を受けた。ここでは、これまでに依頼を受けた例を紹介し、最近臨床で問題となる補体異常について報告する。

## 〈方法〉

臨床医から相談を受け、精査が必要であると判断される場合、患者血清（多くの場合血漿も）を送付してもらい、まず CH50、ACH50 を測定する。その結果をもとに、必要とされる各種の補体成分の溶血活性や蛋白濃度を測定し解析する。臨床医にはデータとともに病態に関するコメントを送り返している。

## 〈結果〉

依頼を受けた 47 件のうち、補体活性化が起こっている場合が 11 例、コールドアグチベーション現象は 1 例、補体成分欠損症は 8 例であった。C9 欠損症が多い（4 例）が、まれな欠損症として C1q 欠損症、C3 欠損症、C5 欠損症、C7 欠損症各 1 例ずつが明らかとなった。最近では溶血性尿毒症症候群と関連する Factor H の依頼も数件あった。

## 〈参考文献〉

- 1) 畑中道代 他、最近の補体測定法、臨床検査 52 : 911-916、2008.
- 2) 北村 肇 他、広範囲 血液・尿化学検査・免疫学的検査 (3)、C4、C5、日本臨床 増刊号: 84-91 (2005)
- 3) 北野 悦子 他、同上、C2、C3 : 59-66 (2005)